徳山教会　待降節黙想会　主の祈り　2020 年 11 月 29 日

参考文献

『十戒・主の祈り』 教皇講話集　教皇フランシスコ　ペトロ文庫　2020 年 9 月

『イエスの教えてくれた祈り 「主の祈り」を現代的視点から』カルロ・マリア・マルティーニ著　篠崎榮　レナト・フィリピーニ共訳　教友社　2013 年

導入（狙い・テーマ）

「ゾウさん、ゾウさん、お鼻が長いのね」 周南市出身の　まど　みちおさんの作詞の歌。
動物に「さん」付けする。 キリンさん、カバさん、親しみを込めることで近く感じる。

大人になると「これはアフリカ象」「インド象」分類して詳しく説明できることを大事にする。けれども親しみはどうでしょうか？

神様に対してはどうでしょうか？
子どもが「ゾウさん」と呼ぶように神様に呼びかけているでしょうか？

どのようにしたら子どもの親しさで神様に祈れるでしょうか？

子どもたちの平和への祈り（難民のお友だちへの祈り）黙想会の謝礼は難民支援協会へ送金します。
「こまっているおともだちが　あぶないくにから　あぶなくないくにに　もどれますように」
「せかいじゅうのおともだちが　うんどうかいできる　へいわがきますように」
難しい言葉は使っていませんが、親しみがこめられた、本質を突いた祈りです。

イエスは「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢いものには隠して、幼子のような者にお示しになりました。」（ルカ 10:21）と言われました。

今回の黙想会は、教皇フランシスコの「主の祈り」講話集から**「子どもの親しさで祈る感覚」を身につけられたら、と考えました。**「主の祈り」は 1 分足らずで唱えられます。けれども、**1 つ 1 つの祈願に集中して祈れたら生活が変わります**。コロナ禍でも変えることができるはずです。イエス様が教えてくださった「主の祈り」で生活を変えましょう。

黙想会では祈り切れません。14 項目を毎日少しずつ繰り返し祈りましょう。2021 年 4 月 4 日の復活祭には祈りの成果が出ているでしょう。その時を楽しみに祈り続けましょう。

1．私たちにも祈りを教えてください

イエスは、親に教えられてユダヤ教の祈り（詩篇などを用いて）を周りの人たちと同じように祈っていました。それでも、祈り方には何か神秘的なものがありました。そのことを弟子たちは感じて「主よ、私たちにも祈りを教えてください」（ルカ　11:1）と願い出ます。イエスはその願いを拒まれはしません。イエスは御父との親しい交わりを独占されようとは思いません。イエスはまさに、御父との交わりを広めるために来られたのです。きっと、私たちの祈りの先生になることも望んでおられます。
長年祈り続けても、まだまだ学び続けなければなりません。自分が神に捧げる祈りが、本当に神の望まれる祈りかどうかも私たちにはわかりません。聖書には、神から拒絶される祈りについて語られています。ファリサイ派と徴税人のたとえです。ファリサイ派は傲慢で、祈っている姿を人に見てもらおうとします。「祈るときにも、あなた方は偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらうおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」（マタイ　6:5）　つまり、祈っているふりで心は冷たいままです。一方の徴税人は自分の至らなさに胸を打ちます。「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（ルカ　18:14）　祈りの第一歩は、へりくだることです。神のもとに行って「私を見てください。私は罪深いのです。弱くよこしまな者です」と告白することです。へりくだりから始めてください。そうすれば、主は聞いてくれます。身を低くし

た祈りは、神に聞き届けられます。

待降節の始まりに「主よ、私たちにも祈りを教えてください」と繰り返し唱えることは最高で最適な祈りです。復活祭まで「主よ、私たちにも祈りを教えてください」と唱え続けましょう。そうすればきっと、主は私たちの祈りを聞かずに放っておいたりなさらないはずです。(2018 年 12 月 5 日　サンピエトロ広場にて)

振り返りの質問

Q. 今は、神との距離感はどうでしょうか？　祈るときに、神と親しくなる工夫を思い付きますか？

2. 信頼して願い求める祈り(嘆願の祈り)

イエスが弟子に呼びかけたのは「神に近づきなさい」「信頼して願い事を打ち開けなさい」でした。イエスは、神に向かって「全能者」「いと高き方」「こんな私とはかけ離れた方、と呼びかけなさい」とは言われません。ただ「お父さん」、それも無邪気に子どもが父親を呼ぶように「お父さん」と呼びかけなさいと言われます。「お父さん」という言葉に、「親しさ」と「神様の子としての信頼」が表れています。神へのこのような呼びかけは、これまでにはありませんでした。(ユダヤ教にはない)イエスの革命的な新しさです。

私たちの最初の祈りは、生まれて初めて息をするときの産声と言えます。新生児はその泣き声から祈り始めています。お腹が空いたり、困ったことを泣き声で訴えます。成長するにつれて、パンや日ごとの糧、幸福への追求を言葉にして願うようになります。

イエスは、どんな苦しみも悩みも天の父に投げかけ(表現がどうかは問いません)、対話することを望んでおられます。

「信仰を持つとは神に叫びを上げる習慣が身につくこと」と言った人がいます。福音書のバルティマイがお手本です。(マルコ 10:46～52)　ティマイの子で、エリコの町の門のところで物乞いをしていた盲人バルティマイです。周囲には立派な人がいて、彼に黙りなさいと命じていました。「いいから黙りなさい。主がお通りなのだ。静かにしなさい。邪魔をしてはいけない。先生はお忙しいのだから。迷惑をかけてはいけない。困らせないで欲しい。」それでも彼は、イエスが最後には窮状に目を向けてくださることを願って、忠告を意に介さず頑固に訴え続けます。そして一層声を張り上げます。すると育ちの良い人は「やめなさい。お願いです。みっともない。」と言ったのです。それでも彼は、「見えるようになりたい。癒されたい。」と願って「イエスよ、わたしをあわれんでください」(47 節)と訴え続けます。　結局イエスは彼の視力を回復し「あなたの信仰があなたを救った」(52 節)と言われます。繰り返した嘆願が決定的でした。大勢の常識よりも、強い願いが信仰と認められました。常識の範囲にとどまっていたら、彼は絶望から解放されなかったでしょう。嘆願の祈りが苦しみから解放してくれました。

また、信じる者は、神を賛美したくなります。福音書は、イエスの心から湧き出る、御父への感謝、驚きにあふれた歓喜の叫びを伝えています。(マタイ 11:25～27)　初期キリスト者は、主の祈りに栄唱を加える必要を感じていました。「力と栄光と永遠はあなたのものだからです」(「12使徒の教訓」8・2)

嘆願の祈りは、自然と湧き出るもので真の祈りです。父である方、優しい方、いつも見守ってくれる方、神への信仰の行為です。小さく、罪深く、困窮している者の信仰の行為です。神は「お父さん」です。私たちをどこまでもあわれんでくださる方です。怖がらずに「お父さん」と子どもたちに呼んで欲しい、と望まれています。また、苦しい時には「主よ、どうしてこんな目に遭わせるのですか？」と言うことを望んでおられる父なの

です。だからこそ私たちは、何でも神に話すことができるのです。人生で、まだ正せずにいることや、納得できずにいることでも父なる神に打ち明けることができます。そして神は、人生の最後の日までいつも共にいることを約束してくださいます。飾らずに「父よ」「お父さん」と呼びかけて主の祈りを祈り始めましょう。神は私たちをわかってくださり、深く愛してくださっているのですから。(2018 年 12 月 12 日　サンピエトロ広場にて)

Q. 拙い言葉でも自分の素直な思いを神に訴えていますか？
知識より、心からの望みを神に願っていますか？
自分の祈りが叶えられた体験がありますか？　それはしつこく願い続けた祈りですか？

山上の説教の中心

私たちの神は、好意を勝ち取るための犠牲を望んではおられません。そうわかっているのは素晴らしいことです。私たちの神には何も必要ありません。神が唯一私たちに求めておられるのは、神の愛する子どもだとわかり続けるために、神と自分とのコミュニケーションのチャンネルを開けておくことです。神は私たちが大好きなのです。(2019 年 1 月 2 日　パウロ 6 世ホールにて)

3. たたきなさい。そうすれば、開かれる。

きっと、「私たちの祈りの多くは、叶えられてはいないと」という思いがあります。「求めても得られなかったことがどれだけあったか？」「たたいても、開かれなかった経験をどれほど重ねてきたか？」 けれども、そうしたときにも「決してあきらめてはならない」とイエスは忠告しています。 祈りによって必ず現実は変わります。必ず、です。たとえ周囲の状況が変わらなくても、少なくても私たち自身が、私たちの心が変わります。
イエスは、祈る人一人一人に聖霊のたまものを約束しておられます。
神は応えてくださる。不確かなのはその時期ですが、それでも神が応えてくださることを疑ってはなりません。 もしかすると、生きている間ずっと待ち続けなければいけないかもしれません。それでも神は応えてくださいます。

神は「魚の代わりに蛇を与える父親のようではない」と私たちに約束してくださいました。「全ての人の願いはいつか叶えられる」私たちはそう信じるだけです。イエスは言われます。「神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでも放っておかれることがあろうか」(ルカ 18:7)
そうです。 神は裁きを行い、私たちの願いを聞き入れてくださいます。
いつか訪れるその日は、栄光に包まれた復活の日となるでしょう。

祈ることは、孤独と絶望への勝利となります。祈りは現実を変えます。それを忘れないようにしましょう。 状況を変えるか？　私たちの心を変えるか？　どちらにしても必ず変えます。 複雑な事情の中で、そう思えないこともあります。それでも、歴史は動いていて、私たちは神の国のために歩み続けています。

人生の先に何があるでしょうか？　祈りの先に、人生の最後に何があるでしょうか？　御父がおられます。
腕を大きく広げて全ての人を待っておられるお父さんです。その御父を見つめましょう。
(2019 年 1 月 9 日　パウロ 6 世ホール)

Q. 願いごとを神に執拗に訴えているでしょうか？　適当なところで諦めてないでしょうか？

4. アッバ、父よ

イエスの「アッバ、お父さん」の呼びかけの言葉が私たちの祈りの到着点、ということを考えます。
「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によって私たちは『アッバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ8：5）
「あなたがたが子であることは、神が「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、私たちの心に送ってくださった事実から分かります」(ガラテ4：6)
イエスと出会い、イエスの教えを聞いてからは、キリスト者はもう神を恐れる者ではありません。神に怯えるのではなく、神への信頼が心の中に満ちてきます。創造主を「お父さん」と呼んで、話しかけることができます。この呼びかけはユダヤ教にはない、キリスト者独自で重要なので原語のアラム語の「アッバ」がそのまま用いられます。

新約聖書でアラム語の表現がそのままギリシア語に翻訳されずに用いられるのは滅多にないことです。この「アッバ」というアラム語には、イエスご自身の声が「録音された」かのように残されているように思えてなりません。イエスの母国語に敬意を払ったのです。主の祈りの最初の言葉からすぐに、キリスト教の祈りの持つ画期的な斬新さに触れます。

「父親」という人間像のシンボルを祈りに用いるのではなくて、イエスの子と父の世界を入れるかが祈りの鍵です。それができれば、本当に（深く）主の祈りを祈れます。 「アッバ」と呼びかける方が、「父よ」と呼ぶよりもずっと親しみがこもって、心に染みます。だからこそ、このアラム語の「アッバ」に「パパ」「父ちゃん」という訳語を提唱する人がいます。

「私たちの父よ」の代わりに「パパ」「父ちゃん」と呼びかけるのです。これからも「私たちの父よ」と呼びかけますが、心では「パパ」と呼んでみましょう。 「パパ」や「父ちゃん」と呼びかける子と父の関係にように、神と関わるためです。 こうした言い方には愛情がにじみ出て、子どもの頃の情景の投影がじんわりと漂います。自分に限りない優しさを向ける父の抱擁にしっかりと包まれた子どものイメージです。 ですから皆さん、ちゃんと祈るには、子どもの心を持つべきです。 「神様なしで間に合っています。」という傲慢な心ではいけません。それだと、きちんと祈れません。お父さんの、パパの腕に抱かれた子どものように祈るのです。

新約聖書は、「アッバ」の意味をうまく説明してくれます。ルカ15章にある放蕩息子のたとえは親しみと父子ニュアンスを物語ります。長い間自分を待っていた放蕩息子が、父に抱擁されたて「アッバ」の祈りを口にしたことを想像してみてください。父は息子をどれだけ愛おしく思っていたか？ それを理解した息子は「アッバ」と短い言葉で受けた愛情を表現します。そう思えば、生き生きとした感覚が強くなります。
「神様、あなたは愛することしか考えていない。足りないところではなく愛だけを覚えておられる方」 子を思い、子をかばい、盾となって愛し続けてくれます。

「アッバ」。キリスト者の祈りを深めるには、この一言（イエスの父子関係）を心に抱くだけで良いのです。聖パウロ も手紙の中で同じ道をたどっています。イエスから教わった祈りの道ですから、それ以外はあり得ないのです。この呼びかけには、すべての祈りを引き寄せる力があります。
あなたが神のことを忘れたとしても、神はあなたを愛しておられます。あなたが自分の才能をすべて無駄に思っても、神はあなたの良さに気づいてくださいます。神は父であるだけでなく、母のようにあなたへの愛を抑えられない方です。母の10ヶ月の懐妊の期間を遥かに超えて、「永遠に続く懐妊の期間」を愛し続けます。

放蕩息子がそうであったように、私たちも神から離れてさまよったり、打ち捨てられたと感じる孤独に陥ったりします。また、過ちを犯して罪悪感に沈むことがあるでしょう。そんな苦しい時でも「アッバ」と子どもが甘える感じで呼びかけたら、祈る力が得られます。忘れないでください。心の中に醜いことや、自分では解決できないこと、神に顔向けできないと思うことがあったとしても、神は決してあなたから顔を背けることはありません。「アッバ」と呼びかけたら、神は必ず応えてくれます。「自分ほどみじめな者はいません」と思っていても、あなたのことが大好きな父親がいるのです。

「アッバ」と祈り始めてください。そうすれば、神が私から目を離さずにおられることを沈黙のうちに感じ取るでしょう。
「父なる神様は、私はこんなことをしてしまったのです」「でも、ずっとお前を見守っていたよ。すべて分かっているよ。私はずっとここにいて、お前のそばにいて、お前を愛し続けていたよ。」「アッバ」と語りかけることを忘れないでください。
(2019 年 1 月 16 日　パウロ 6 世ホール)

Q. 神を身近に感じて祈っているでしょうか？　どんなときに近くに感じるでしょうか？　「アッバ」あるいは「パパ」「お父さん」と繰り返し呼びかけてみましょう。心に何が浮かんできますか？

5. 天におられる　私たち皆の父

u“V,É,¨,ç,ê,é v,Æ,¢,¤·¥Œ»,Í A-Ú,ð「“V」,É ã,°　ながら祈っ,½ƒCƒGƒX,Ì,æ,¤,É AŽ„,½,¿,à 視線を「天」に向けるように‘£します。Ž„,½,¿,Ì 父は、どこにおられるかまったくわからない方ではありません。「天」という、父がおられる場所に向かって祈りを捧げます。

「天」は、信仰の一·,Ì 始まりと-Ú“I’n です。「天」は神様の素晴らしさ(善)であふれています B また、ƒCƒGƒXŽ© g,Ì 誕生、十字架、復活、昇天のように、わたしたちも「天の父へ」と帰還していきます。

祈るときには、静かに自分の部屋に入り、世間から離れて「お父さん」と呼びかけて神に向かいなさい、とイエスは言われます。(マタイ6:6参照)

「あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところを見ておられるあなたの父が報いてくださる」
真の祈りとは、良心や心の中の、人目につかないところにあるものです。祈りは偽りを嫌います。神と共にいるときに、自分を取り繕うことはできないからです。神は、私たちのありのままの偽りのない心をご存知です。神との対話の根底には、沈黙の対話があります。愛し合う二人が見つめ合うように、神と人が視線を交わす。それこそが祈りです。神を見つめ、神に見つめていただくのが祈りです。自分の思いを言葉にしなくてもいいのです。

祈りは内なるものであっても、自分の部屋の外のことに関心を持たなくていいのではありません。周囲のこと、問題ごとなど、多くの事柄を心に留めて祈りに込めるのです。　主の祈りには「私」という言葉はありません。「私たち」しかありません。「私の糧」「私の罪」ではありません。空腹のために食べ物を求めるのも、すべて複数形です。「世界の貧しい人皆にお与えください」と天のお父さんに願います。主の祈りは、神に対しては「あなた」(み名、み心、み国)、人間からは「私たち」で祈ります。これもイエスからの大事な教えです。

どうしてなのでしょう？　神との対話には、個人主義が入る余地はないのです。世界で自分だけが苦しんでいるかのようなことは考えられないのです。私たち兄弟姉妹としての共同体の祈りでなければ、神に捧げる祈りなりません。

キリスト者は、自分の隣で生きる人々の困難を祈りに込めます。神の前で、友、そして敵対する人を含む人の顔を思い浮かべて祈ります。気に入らない人でも、危険な者として祈りから追い払うのではなく、その人のことまで祈ります。苦しむ人を念頭に入れないなら、貧しい人の涙に慣れ切っているなら、その心は石になっているのです。そんなときは、主に魂を触れていただき、心をほぐしていただきましょう。「主よ、私の心を柔らかくほぐしてください。人の痛みを理解し、担うことができますように」と願いましょう。これは美しい祈りです。

キリストは、世の人々の苦しみに無傷で通り過ぎたのではありません。孤独、身体の痛み、心の痛みに触れるたびに、母の胎のように激しいあわれみを覚えたのです。「あわれみを覚えること」がまさにキリスト教らしい言葉です。忘れずにいましょう。「あわれみを覚える」とは福音のキーワードの動詞です。これこそが、善きサマリア人を駆り立て、道端の怪我人に歩み寄らせたのです。頑なな心を持った人と大きな違いです。

自分を振り返ってみましょう。私の祈りは、心穏やかになるためのものでしょうか？　それともまだ顔を合わせたことのない人を含めた叫びを神に届けるものでしょうか？　祈りが心の安定剤だと思っているならとんでもないことです。「私」の祈りになっています。　イエスの教えたのは「私たち」という祈りです。自分一人の平穏を求めるのではなく、痛んでいる兄弟姉妹に責任を感じていきましょう。
一見、神を求めていないような人もいますが、イエスは彼らのためにも祈るように求めています。イエスが来られたのは健やかな人のためではなく、病の人のため、罪人のためでした。（ルカ5:31 参照）　御父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせてくださいます。（マタイ5:45 参照）　そのように思える心のゆとりがない時もありますが、頭の中では理解しておきましょう。御父は、すべての人を愛しておられます。

人生の最期に、敵を含めてどれだけ愛したか、愛に基づいて裁かれます。感情としての愛情だけでなく、福音の掟に沿って愛したか裁かれるのです。「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこのもっとも小さな者にしたのは、わたしにしたのである」（マタイ 25:40）
（2019 年 2 月 13 日　パウロ 6 世ホール）

Q. 神への願い事を思い浮かべてみましょう。「私の祈り」と「私たちの祈り」の割合はどうでしょうか？　顔を合わせてない人のこと、今苦しんでいる人のことまで祈っているでしょうか？

6. み名が聖とされますように

キリスト者の祈りで大切なのは、神に自分を委ねることです。「主よ、あなたはすべてをご存知です。あえてわたしの苦しみをあなたに語る必要はありません。わたしのそばにいてくださること、それだけを願います。あなたはわたしの希望です。」

興味深いことに、山上の説教でイエスは主の祈りを教えるとすぐ「物事に思い煩ってはならない」と言います。一見すると矛盾します。最初に日ごとの糧を願い求めるように教え、次に「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と思い煩うな（マタイ6:31）と言っています。ですが矛盾しているように見えるだけです。キリスト者の頼み事は、御父への信頼を表しています。その信頼があるからこそ、私たちは心配も動揺もせ

ず、神の国に必要なものを願い求めることができるのです。

だからこそ、私たちは「み名が聖とされますように」と祈るのです。「み名が聖とされますように」という願いには、御父の美と偉大さに対するイエスの賛美があります。皆が神の真の姿を知り、神を愛するように、という願いを感じます。また、私たちの家族、共同体で神の名が聖とされるようにという祈願でもあります。神はご自身の愛で私たちを聖化してくださいますが、私たちによってみ名を証ししなければなりません。神は聖ですが、私たちの生き方に聖なるものがなければ、大きな矛盾が生じます。神の聖性は、私たちの行い、生活によって映し出されなければなりません。

御父は、私たちを愛しておられます。御子イエスは、私たちのために命を差し出してくださり、私たちを助けようとその腕を広げておられます。また、聖霊は私たちの救いのために人知れず働いておられます。私たちはどうでしょうか？　み名を人々に伝えているでしょうか？
(2019 年 2 月 27 日　サンピエトロ広場)

Q.「み名」への信頼・賛美を口にしているでしょうか？　神の聖性を生活に反映させているでしょうか？

7. み国が来ますように

この願いは、イエスご自身の心から湧き出ています。共観福音書の中に「み国」「神の国」という言葉が、イエスの口から 90 回以上のぼっています。「み国」への強い憧れがイエスの中にあります。「み国が来ますように」は、イエスを突き動かしていた望みをまとめた言葉です。イエスの望みを私たちの望みにする必要があります。

ガリラヤで宣教を始めたイエスの第一声は「時は満ち、神の国は近づいた」(マルコ 1:15)でした。イエスは、ひたすら喜ばしい知らせを告げます。イエスは、信仰を押しつけたりなさいません。神の国が、神の子によって到来します。

み国の到来のしるしはたくさんあります。イエスは、身体や精神に病を抱えた人を癒し、社会から疎外された人を手厚く迎えます。律法を守れない罪人に赦しを与え、救いを約束します。　イエスご自身が、神の国の到来、神の国のしるしです。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされる」(マタイ 11:5)

私たちも、イエスの心に重ね合わせて「み国が来ますように」と熱心に祈りましょう。イエスは来られましたが、世には和解がなく、不正がはびこり、罪の重荷に沈み、苦しんでいる人が大勢います。キリストの勝利はまだ完成していません。このような状況下で「お父さん、私たちにはお父さんの力が必要です。あなたには、私たちの救い主でいて欲しいのです」「あなたの国が実現しますように！　私たちの只中にあなたがいてくださいますように」と訴えるのです。

「どうして神の国がなかなか訪れないのだろう？」と思う時があります。イエスは、たとえで説明されます。神の国とは、良い麦と毒麦が一緒に育つ畑のようだ、と言われます。すぐに介入して、良くないと見えるものをすぐに抜き取るのは、神のなさり方ではありません。神は私たちとは違います。神は辛抱強い方です。力づくで「み国」を築くのではありません。柔和になさいます。(マタイ 13:24～30　参照)

もちろん、神の国は力強い。けれども、この世の尺度で量るのは良くありません。絶対的な力で人を相手を

押さえつけるのではありません。目には見えなくても、生地を膨らませるパン種のようなものです。（マタイ 13:33 参照） また、からし種にも似ています。どの種よりも小さいですが、成長を始めると、庭のどの木よりも大きくなります。（マタイ 13:31～32 参照）

神の国の実現の仕方は、イエスの生涯と重なります。その時代の人たちにとって、イエスは弱々しく写り、当時の歴史家たちに殆ど知られませんでした。イエスはご自身を、一粒の種は地に落ちて死ぬが、そうしてこそ「多くの実を結ぶ」と表現されました（ヨハネ 12:24 参照）その芽が育つのは、蒔いた人の働きというより、神のわざです。（マルコ4:27 参照）

「み国が来ますように」 この祈りを私たちの罪と過ちの中に蒔きましょう。人生に打ちのめされ、挫折した人に、愛よりも憎しみを味わった人に、生きる目的がわからず虚しく過ごす人に差し出しましょう。 正義のために闘っている人に、信仰や自由を求めて闘っている人に、善より悪の力が強いと諦めてしまった人に、嘆願の祈りを差し出しましょう。 数え切れないほど、この希望の言葉を繰り返しましょう。
「主イエスよ、来て下さい」（黙示録 22:20 参照）と唱えたら「私はすぐに行く」と答えてくださるでしょう。「み国が来ますように」は、「主イエスよ、来て下さい」と同じです。イエスは、予想もできない形で来て下さいます。「み国が来ますように」と唱えたら「わかった。すぐに行くよ」と返事をもらえる。そう信じましょう。そんな関係を築きましょう。
（2019 年3月 6 日 サンピエトロ広場）

Q.「み国」という言葉にどんな憧れを持っていますか？ 自分はどんなところで「み国」の実現のために働いていますか？

8. み心が行われますように

「人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」（ルカ 19:10） これこそが神の望みです。イエスは、失われたものを探し出して救うために受肉しました。だから、私たちは神様が自分たちを見つけ出してくれるように祈ります。そして、世界中の失われた人すべてが見つけ出されるように祈り求めます。

罪人ザアカイは、イエスを見たくて仕方なくて木に登りました。でも、それよりずっと前から神が自分を探していたことはわかっていません。イエスはその場に来る「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」（ルカ 19:5）と言います。そして次のようにはっきりと言います。「人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」（10 節）
神は、一人一人を探しておられます。神はなんと偉大な方でしょう。どれほどの愛を注ぎ続けておられるでしょう。

聖パウロ は「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」（1テモテ2:4）と記しています。これが神の望みです。人間の救い、人々の救い、私たち一人一人の救いが神の願いです。神は、私たちをご自身の方に引き寄せ、救いの道に進ませようと心の扉をたたいています。

神が私たちを（自分を縛っているものから）解放したいと望んでおられることを念頭にして「み心が行われますように」と祈りましょう。父親の深い愛を信頼して、子どもの心で祈りましょう。私たちの幸せといのち、救いを望んでおられる父なる神に信頼して祈りましょう。

しかし、世界にはみ国が実現していない現実があります。預言者イザヤの言葉を噛み砕いてこう言うこともできます。「お父さん、ここです。戦争、権力の濫用、搾取があります。でもあなたが私たちの幸せを願っておられることを知っています。ですからどうかお願いします。み心が行われますように。主よ、世の為政者の計画を覆して下さい。剣が鋤になるよう、槍が鎌になるようにして下さい。もう誰も、戦術の訓練をしないでいいようにして下さい」（イザヤ2：4参照） 神は平和を望んでおられます。

主の祈りは、愛によって世界を変えようという熱意を燃やす炎です。イエスの愛と同じ愛を私たちの中に燃え立たせる祈りです。神は善をもって悪に打ち勝つこと、現実を変えることを望んでおられます。私たちもそう信じて祈るのです。試練にあるときにも、神の望み（み心）が実現するよう願って神に身を委ねるのです。

ゲッセマネの園で、激しく苦悩して祈っておられたイエスもそうでした。「父よ、み心なら、この杯（十字架）を私からとりのけて下さい。しかし、私の思いではなく、み心のままに」（ルカ22：42）イエスはこの世の悪につぶされますが、信頼する御父の愛に身を委ねます。殉教者たちも、試練の中で同じように神の愛に身を委ねました。神は、愛のゆえに困難な道を歩ませますが、いつでも私たちと共におられ、寄り添ってくださっています。信者にとってこれは希望以上の確信です。
イエスは言われます。「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わず、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる」（ルカ18：7～8） 主は、このような方です。私たちを愛し、大事に思っておられます。さあ、一緒に主の祈りを祈りましょう。（2019年3月20日サンピエトロ広場）

Q. 神が自分を見つけ出してくださっている感覚があるでしょうか？
自分の思いと食い違っても「み心」を願ったことがありますか？
私の中に「み心」は実現しているでしょうか？

9. 私たちの日ごとの糧をお与えください

私たちは、自足できる被造物ではなくて、毎日何かを食べる必要があります。これは、私たちが忘れがちなことです。

福音書には、ある人は癒しを、ある人は清めを、ある人は視力の回復を、そしてある人はパンを求めています。イエスは、生活の基本（パン）への願いに無関心ではありません。

イエスは、繰り返される毎日の糧を御父に求めるよう教えておられます。 今日なお、どれほど多くの親たちが子どものための明日の食料を手に入れられなくて苦しんでいることか、想像してみて下さい。 この祈りは、安全で快適な家ではなく、必需品が事欠く生活にいる人のことを考えると新たな意味を帯びてきます。生活に困窮している人の思いを自分の思いとすることから祈りが始まります。

「父よ、私たちのために、すべての人のために、今日必要なパンが与えられるようにして下さい」と祈りましょう。「パン」は、水、医薬品、住居、仕事、そして教育、自由、将来への希望まで含まれます。

キリスト者が願う「糧」は「私」のものではなく「私たち」のものです。世界の兄弟姉妹のために祈りましょう。お父さんがくださった「糧」を取り合ったり、搾取してはいけません。この祈りには、共感と連帯の姿勢がありま

す。「糧」を親しい間の人たちだけで分かち合っていたら、とがめられてしまいます。父なる神は、愛もパンも分け合うことを望んでおられます。

パンを増やす奇跡のことを考えましょう。あのとき、イエスの前にお腹をすかせた大群衆がいました。イエスは「何か持っている人はいないか」と尋ねます。すると、一人の少年だけが自分の 5 つのパンと 5 匹の魚を差し出します。(ヨハネ6:9参照)イエスは、彼の惜しみない愛を倍増されました。 この少年は、主の祈りの意味がわかっていました。「糧」は、自分だけのものではないのです。「糧」は、個人の持ち物ではなく、神の恵みとして分け合うものなのです。

あの日、イエスが行った奇跡の本当の意味は、増やすことではなく(それも大切ですが)分かち合うことでした。あなたが持っているものを差し出せば、イエスが奇跡を行うのです。
差し出されたパンを増やすことで、前もってイエスは聖体のパンを差し出すことを予告されました。聖体は「日ごとの糧」を求める願いを強くしてくれます。聖体をいただくことで、神への渇きを満たすことができます。(2019 年 3 月 27 日　サンピエトロ広場)

Q.「日ごとの糧」への願いを誰に向けて祈っているでしょうか？　自分は衣食住に困ってないからと、この祈願をお座なりにしていないでしょうか？

10. 私たちの罪をおゆるしください

日ごとの糧を願った後、イエスは他者との関わりの話をされます。「私たちの負い目をゆるして下さい。私たちも自分に負い目のある人をゆるしましたように。」(マタイ6:12)と御父に願いなさいと教えます。 パンが必要なように、ゆるしも必要です。しかも毎日必要です。

どんな祈りにも共通する大事な点があります。たとえ完璧な人で、高徳な生活をしていて一点の曇りもない聖人でも、御父に頼る子どもの一人だ、ということです。キリスト者の生活で一番危険な態度は、思い上がりです。思い上がる人は、自分はきちんと生きていると思っています。
ファリサイ派は神殿できちんと祈っていますが、実際には神の前で自画自賛しています。「主よ、私が他の者たちのようでないことを感謝します」(ルカ 18:11 参照)自分は非の打ち所がないと思い、他者を批判する思い上がった人です。それに引き換え、皆に蔑まれている徴税人は、神殿の敷石の前に立って、自分は神のいつくしみにあずかる資格はないと考えています。イエスは「義とされて帰ったのはこの人の方だ」(ルカ 18:14 参照)と言われます。すなわち、「ゆるされて救われたのはこの人であって、あのファリサイ派の人ではない」(14 節)のです。徴税人は思い上がらず、自分の限界と非を認めていました。

目に見える罪もありますが、目に見えない罪もあります。この罪は、敬虔に修道生活を送る人にも及びます。17 世紀、ジャンセニズムの時代に、名の知れた修道会がありました。修道女たちには非の打ちどころがなく、天使のように清らかで悪魔のように尊大だったと言われています。それではいけません。罪は、兄弟姉妹を引き裂きます。罪は、自分が他者より優れていると思わせます。自分を神のように思わせるのです。

神の前では、私たちは皆罪人で、胸を打つしかありません。神殿にいた徴税人のように、一人残らず罪人です。「自分に罪がないというなら、自らを欺いており、真理は私たちのうちにありません」(1ヨハネ1:8)自分に罪がないという人は、自分を欺いているのです。

私たちは、多くのものを受けています。いのち、生きる希望、喜び、家族・・・私たちは恩を受けている者です。たとえ苦しい生活を送っていたとしても、恩を受けてきたことを忘れてはいけません。無から、神が命を与えこの世に引き出して下さいました。それは奇跡とも言えます。

自分自身の光で輝く者はいません。「月の神秘」という言葉があります。月は、自分自身が光を放つのではなく太陽の光の反射です。私たちも自分自身には光を持っていません。私たちの光は、神の恵み、神の光を反射させている光です。あなたが愛を行うなら、それは子どもの頃に誰かがあなたを微笑ませ、微笑み返すように教えたからです。誰かが教えてくれたからできるようになったのです。

私たちは人生で過ちを犯した人を知っています。本人の責任はもちろんありますが、誰かから見捨てられた結果であることが多くあります。果たしてその人だけが、罪の咎めを受けるべきなのか、考えてみることが大切です。愛された体験、ゆるされた体験のなさ、逆の意味での「月の神秘」の反映で生きている人もいるのです。 神は、私たちを愛してくださっている。その「月の神秘」として光を放ちましょう。(2019 年 4 月 10 日　サンピエトロ広場)

Q. 罪人のイメージを神への恩知らずで捉えてみましょう。神から自分はどれだけ受けているでしょうか？受けた恵みを理解しているでしょうか？　良い光を反射させているでしょうか？

11. 私たちも人をゆるします

「私たちも自分に負い目のある人をゆるしましたように」(マタイ6:12)を掘り下げます。
私たちはすべてのものを神から受けています。人も教会も「セルフ　メイド　マン」(自分独自の力で出来上がった者)ではありません。私たちのアイデンティティは、受けた恵みで生きる者だということです。

祈る人は「ありがとう」の言葉を口にする習慣があります。私たちがどんなに努力しても、神への負い目がなくなることはありません。また、どんなに努力しても神からのゆるしを求めなければならないことが必ず起きます。逆説的ですが、聖人たちがそうであるように、イエスの教えに忠実に生きようとするほど、神にゆるしを願うようになります。小さな気の緩みや、憎しみからのゆるしを願います。「父なる神よ、私たちの負い目をおゆるしください」と心から願います。

この願いは、前半と後半が一体になるように繋げられています。神からのいつくしみという縦の関係があって、今度はそれが兄弟姉妹へのゆるしという横の関係に変換するように呼ばれています。いつくしみ深い神は、私たちにもいつくしみ深くなるように招いています。主への負い目のゆるしへの願いと、自分にひどいことをした人へのゆるしの実践を「ように」で結びつけています。

イエスは、悔い改める一人の罪人には、回心の必要がない大勢に正しい人よりも大きな喜びがある、と言われます。(ルカ　15:7、10参照)　再び抱きしめてもらいたいと願う人の罪を、神がゆるすことを拒む箇所は福音書にはありません。

神の恵みは豊かですが、そこにはいつも義務が伴います。多く受けた人には多く与える義務があります。多く受けた人は、多く与える感覚を身につけましょう。

マタイ福音書では、主の祈りの 7 つの願いを記したあとに、兄弟同士のゆるしに触れています。これは偶然ではありません。「もし人の過ちをゆるすなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをおゆるしになる。

しかし、もし人をゆるさないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをおゆるしにならない。」（マタイ6：14～15）「あの人のことは絶対にゆるさない」と思うこともあるでしょう。しかし神は、あなたがゆるしの扉を閉めないことを望んでおられます。

ある司祭が死の間際にあった高齢の女性に病者の秘跡を授けに行きました。その女性はもう話すことができません。司祭は「あなたは、自分の罪を悔い改めますか？」と聞きました。その女性は「はい」と答えました。もう罪は告白できませんでしたが「はい」と答えたのでそれで十分でした。次に「あなたは人をゆるしますか？」と尋ねました。すると「いいえ」と言ったのです。死の床で「いいえ」と言う女性に司祭は心を痛めました。ゆるさなければ、神からもゆるされないからです。
私たちも考えてみましょう。ゆるすでしょうか？　ゆるせるでしょうか？　もしゆるせないなら「父よ、私にはできません。あんなにひどいことをした人たちを、ゆるすことなどできません。」とゆるすための力を願いましょう。
「主よ、ゆるせるように助けてください。」 この祈りは、神への愛と隣人愛との結びつきがあります。愛は愛を呼びます。ゆるしはゆるしを呼びます。

もう1つのゆるしに関するたとえ話を考えましょう。（マタイ18：21～35 参照）家来が借りていたのはとても返せる額ではありませんが、主君は全額帳消しにします。しかし、ゆるしてもらった家来がそれよりずっと少ない額の借金をしている仲間を叱りつけます。最後に主君は、この家来を呼び戻して断罪します。 ゆるす努力をしなければ、あなたはゆるされません。愛する努力をしなければ、あなたも愛されないでしょう。

イエスは、人間関係にゆるす力を与えてくださいます。人生では、すべてが正義や言い分によって解決されるわけではありません。悪魔は報復に長けています。報復をやめなければ、それは蔓延し、世界を窒息させる危険があります。恵みの物語を回復しましょう。人は愛することで救われるのです。

イエスは「報復のおきて」ー自分がされたことをやり返すーを、愛のおきてに変換してくださいました。神が私たちになさったことを、今度は私たちがしましょう。神は、悲しい出来事をゆるしによって温かな物語に書き換える恵みを与えてくださいます。言葉や微笑みを通して、私たちは神から受けたものを他者に手渡すことができます。私たちは「ゆるし」と言う貴重なものを受けています。だから、人々にも分け与えていきましょう。
（2019 年 4 月 24 日　サンピエトロ広場）

Q. 自分が受けているゆるしと、人に与えられないゆるし、を比較してみましょう。それでも、ゆるせないと感じているなら、ゆるす力を神に願いましょう。

12. 私たちを誘惑におちいらせないでください

主の祈りの最後から 2 番目の祈りは、私たちの自由 vs 悪魔の陰謀、の対決の場面です。父親は我が子に罠を仕掛けたり、人間同士を張り合わせたり、人間を試して喜んだりする人ではありません。「誘惑に遭うとき、誰も「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、ご自分でも人を誘惑したりなさいません。」（ヤコブ1：13） 御父は、悪の創造者ではありません。魚を欲しがる子どもに蛇を与えたりはしません。（ルカ 11：11 参照）むしろ、悪魔が人間の生活に現れたとき、その人が解放されるように、私たちの傍で闘ってくださる方です。

私たちが誘惑に遭う前に、すでにイエスは誘惑と闘っています。罪人の群れに混じってヨハネから洗礼を

受けた後、すぐにイエスは荒れ野に退き、悪魔から誘惑を受けます。悪魔からの誘惑を経てイエスは公生活を始めます。悪魔はいたのです。それでもイエスは、誘惑を退け勝利します。イエスは、特権的な権力を握るのを退け、完全に私たちの兄弟となられました。（ルカ4：1～12） そして「悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。」（マタイ4：11）
もっとも過酷な試練のときにも、神は私たちを独りにはされません。ゲッセマネで祈るために独りになられると、イエスの心は悶える不安に襲われます。孤独と見捨てられた気持ちを吐露します。そこで親しい弟子に「ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい」（マタイ 26：38）と頼みます。しかし、ご存知のように弟子たちは眠り込んでしまいます。けれども、人が試練のときに神は眠らずにいてくださいます。私たちが苦しむとき、夜通し寝ずに共に闘ってくださいます。それは、お父さんだからです。父親は決して我が子を見捨てません。あの闘いの夜は、イエスの受肉の最後の証印です。神はイエスの底知れぬ深みに共にいてくださいました。また私たちの苦しみの中に降りて来られます。
私たちはイエスの苦難が無駄ではなく、私たちの救いのために神に祝福されていたことを知っています。神よ、私たちから試練と誘惑のときを退けてください。絶望という誘惑から守ってください。しかし、その時が訪れるならどうか私たちが独りではないことをお示しください。あなたは父なる方です。イエスがあの十字架を担われたように、私も十字架を担っていることをわからせてください。あなたの愛に身を委ねられるようにしてください。（2019 年 5 月1日サンピエトロ広場）

Q．自分に働きかけてくる誘惑には、どのようなものがあるでしょうか？　対抗する手段があるでしょうか？悪を退ける力を神に願っているでしょうか？

13．私たちを悪からお救いください

ギリシア語の原文が、とても強烈です。私たちをつかんで食い尽くそうとしている悪魔（1ペトロ5：8参照）の存在が示され、それからの解放を願うのです。ペトロは「悪」を吠えたける獅子のように、私たちを取り囲んで食い尽くそうとするもの、と書いています。

「私たちを見捨てないでください」と「私たちを救ってください」の 2 つの祈りに、キリスト者の祈りの本質が現れています。イエスが教えておられるのは、悪魔が忍び寄る恐れを感じたらすぐに御父に祈る大切さです。人類の道は、苦難に満ちています。主の祈りの最後の祈願がなかったら、絶望にある人、迫害になる人、臨終の人はどう祈ったらいいでしょうか？　最後（7 番目）の祈願は、私たちが極限にあるときに祈るべきものです。

私たちの人生には悪が存在します。これは否定できない事実です。巨大な悪事（例えばナチスのユダヤ人大量虐殺）でも、悪はひっそりと入り込んでいます。音を立てずに毒を吐く蛇のように、人知れず入り込むのです。時にはそれが優勢になったように映ります。神のいつくしみよりも際立っているようにさえ見えます。
祈り人は盲目ではありません。神の前で静かに祈る人には、このような「悪」がはっきりと見えます。私たちをその気にさせ、悪に駆り立て「これをしなさい。これさえすればすべて解決する」とそそのかすのが誘惑です。このような誘惑から影響を受けない人はいないでしょう。自分は「悪」から免れている、と言い切れる人はいません。

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私が願うことではなく、み心にかなうことが行われますように」（マルコ 14：36） イエスは「悪」に差し貫かれて祈っていま

す。ただ死ぬのではなく、十字架上で死ぬのです。孤独で死ぬのではなく、侮辱され屈辱も味わって死ぬのです。人間は、愛と幸福を夢見ますが「悪」に身をさらしながら生きてもいます。だから、絶望に引き寄せられる存在でもあります。

·Ÿ‰¹ ‘,Ì’†,Å AƒCƒGƒX,Í“-Žž,Ì‘½,–,Ì「 g‘Ì“I,Èˆ«」
,©,ç‰ð·ú,µ,Ä,¢,Ü,µ,½ B uƒCƒGƒX,©,ç—Í,ª o,Ä A,·,×,Ä,ÌŽÒ,ð,¢,â,µ,Ä,¢,½ v iƒ<ƒJ6 F19 j
,í,½,µ,½,¿,ª·a,ñ,Å,¢,é,Æ,« A,æ,-—Í,ðŠè,¢< ,ß,é ª<’,Å,· B,µ,©,µ AƒCƒGƒX,Í,à,Á,Æ 底
,Ì [,¢ uˆ« v u“ı“¿“I,Èˆ« v,É‘Î,µ,Ä,Í·Ê,Ì í—ª,ðŽæ,Á,Ä,¢,Ü,µ,½ BƒCƒGƒXŽ© g,ª,·,×,Ä,Ì uˆ« v,ð”w·‰,¤<ê’É,
É-ž,¿,½ŒÂ l“I,È í—ª,Å,µ,½ B,²Ž© g,ª·Ú‘Å,½,ê,Ä‰Ÿ,µ,Â,Ô,³,ê,é,Ì,ðŽó,¯“ü,ê,Ü,µ,½ B ご自身を
¥Žš‰Ë ã,Å·ù,° 、そこでの,ä,é,µ,ð’Ê,µ,Ä「悪」に打ち勝ちました
B u,í,½,µ,½,¿,ðˆ«,©,ç,¨<~,¢,–,¾,³,¢ v,Æ,¢,¤Šè い,É,Í AƒCƒGƒX が捧げてくださった‘½‘å,È<] µ
を”º,Á,Ä,¢,Ü,· BƒCƒGƒX,ÌŒÀ,è,È,¢ˆ¤,É,æ,Á,Ä lŠÔ,Ì「Ž×ˆ«,³」
,ª’¾,ß,ç,ê,é,Ì,Å,· B u,í,½,µ,½,¿,ðˆ«,©,ç,¨<~,¢,–,¾,³,¢ v,Æ,¢,¤<FŠè,Í A [,¢ˆÓ-i,ÅƒCƒGƒX,ÌŽ€,Æ·œŠˆ,É‘i,¦,é,à,Ì,
Å,· B,à,Á,Æ,à [,È uˆ« v,Í AŽŽ,Ý,Ì,³,È,©,Å·‰,¯,é,±,Æ A M<Â,ÆŠó-],ðŽ„,¤,±,Æ AŽ©·ª,É â-],·,é,±,Æ,Å,·
B

キリスト者は「悪の力」がどのように社会を支配していくのか知っています。同時にイエスが「悪の甘い言葉」に負けない方であること、また私たちに寄り添い続けてくださる方で、私たちを助けようとされていることも知っています。イエスは「悪」から私たちを救い、回心のために闘い続ける方です。起きている悲劇に取り乱すこともせず、取り囲む相手に平和の言葉を投げかけます。「父よ、彼らをおゆるしください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23:34)

十字架上のイエスのゆるしから、平和が湧き出します。復活された後、弟子たちには平和の賜物が与えられます。復活したイエスの最初の挨拶は「あなた方に平和があるように」だったことを思い出しましょう。私たちにもゆるしと平和を与えてくださいます。それでも、私たちは「悪の手」に落ちないように「悪からお救いください」「絶望という悪からお救いください」と願わなければなりません。これこそが私たちの希望です。復活されたイエスは、私たちを前に進ませるために「悪から救う」と約束してくださいます。そのことを心に留めましょう。
(2019 年 5 月 15 日　サンピエトロ広場)

Q .自分の身の回りにはどのような「悪」が働いているでしょうか？　また、社会にはどのような「悪」が働いているでしょうか？　神に「悪からの解放」を願っているでしょうか？

14. 聖霊が祈る

新約聖書全体を見ると、キリスト者のどの祈りも主役は聖霊だとわかります。それを忘れないでください。聖霊の力なしに、決して祈ることはできません。私たちの祈り、じっくり祈るように動かす方は聖霊なのです。聖霊こそが主役、私たちの中で真の祈りをささげるお方です。だから「祈りを教えてください」と、聖霊に願いましょう。この方は、イエスの弟子の私たちの心に息を吹き込みます。聖霊が私たちを神の子として、祈れるようにしてくださいます。

イエスは、時に主の祈りとは全く異なる表現でも祈りました。十字架上で唱えた詩編 22 の冒頭の言葉です。

「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)　天の父が独り子を見捨てることなどありうるでしょうか。もちろんあり得ません。ですが、私たち罪人への愛のために、イエスは神から見捨てられた、と思える体験を味わったのです。「わが神、わが神」
悲痛な叫びをあげながらも「わが」という言葉を発しています。「わが」という言葉に御父との結びつきが見えます。信仰と祈りの核のつながりがわかります。

この核から出発することで、どんな状況でもキリスト者は祈ることができます。新約聖書だけでなく、詩編などの祈りを手本に祈ることができます。そして、御父に対しても、兄弟姉妹に対しても祈ることを忘れてはいけません。貧しい人たちが、神からの慰めと愛を受け止められるためです。

この「主の祈り」の講話の最後にイエスの賛美の祈りをもう一度唱えましょう。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢いものには隠して、幼子のような者にお示しになりました。」(ルカ 10:21)
祈れるように、幼子の心(ゾウさん、ゾウさん、と親しく歌う心)にしていただきましょう。聖霊が私たちの中に来てくださり、真の祈りへと導いてくださいますように。(2019 年 5 月 22 日　サンピエトロ広場)

<u>まとめと目標</u>
主の祈りを子どもの心で祈ること、7 つの祈願それぞれに思いを込めて丁寧に祈ること、を毎回心に留めましょう。それができれば、生活が変わっていきます。個人としても、教会としても信仰が成長できます。繰り返しこのテキストを読み直して、主の祈りを深めましょう。その実りを信者同士で分かち合い、社会にも反映させましょう。み国を実現しましょう。